

# 日本人移民がみた戦前ハワイのイメージ

工藤 泰子

## 1. はじめに

2011年、ハワイへの旅行者数は7,299,047人にのぼった。そのうち、日本人旅行者は1,241,805人、半数以上(58.9%)が複数回訪れたことのある「リピーター」であった[Hawaii Tourism Authority(以下、HTA)2012:23]。今日、ハワイへの日本人旅行者の多くは、ワイキキのホテルに滞在して賑やかなビーチやショッピングエリアで忙しく動き回る。旅行者の目的が多様化しているとはいえ、ショッピングを中心とした日本人の行動は、一人当たりの平均消費額からみても、他の国の旅行者と比較して顕著である。観光情報というより買い物情報で埋め尽くされた数々のガイドブックを見る限り、もはやハワイには買い物以外の魅力を感じられない。

戦後、「楽園」のイメージ<sup>1</sup>に触発された多くの観光客がハワイになだれこみ、大衆観光地化が一気に進んだ。1972年には、ハワイ州の観光業収入の割合が軍事と農業を抜いて最大になり、外国資本の企業による不動産投資が相次いだ(山中1993:110)。特に、日本企業によるホテルの買収、ゴルフ場建設、リゾートホテル建設など、日本人の嗜好に合わせた大規模な観光開発は、現地の人々からひんしゅくをかっした。そこには、かつて白人たちによって形成された「楽園」のイメージすらもはやなく、あるのは「安上がりのアメリカ西海岸」としてのリゾート地を求める観光客の姿であった(山中1992:212)。戦後の日本人が抱いてきたハワイやハワイ先住民のイメージは、アメリカのメディアから発信されたイメージに大きく影響を受けたが、戦前は、移民、宗教家、役人、商人等、渡航者自身が時代によって社会的背景の異なるハワイを見て、それぞれの立場から渡航時の様子を記してきた。

本稿では、戦前のハワイ、特に、ハワイ王国から共和国樹立(1894)、米国併合(1900)を経て、観光地化していくハワイが、日本人の眼にどのように映った

のかを検証する。なお、当時のハワイへの日本人渡航者のほとんどが移民であったため、過酷な労働、極貧生活等がハワイのイメージに与える影響を極力排除し、ハワイ上陸時の印象を中心に見ていくこととする。

戦前の渡布移民を時代ごとに分けると以下の通りだが、本稿では、自由移民の時代までを対象期間としている。

元年者時代：明治元年(1868)から官約移民送出まで。明治元年にハワイ総領事ヴァン・リードが明治政府の許可なく組織した日本人初の海外集団移民「元年者」(がんねんもの)の時代。

官約移民時代：明治18年(1885)から27年(1894)まで。明治天皇がカラカウア王より要請を受け、明治政府が組織した集団移民の時代。第26回移民船まで続いた。

私約移民時代：明治27年(1894)から33年(1900)まで。政府による官約移民が廃止され、民間会社によって組織された私約移民の時代。

自由移民時代：明治33年(1900)から日米紳士協約成立(1907)まで。ハワイ併合後の渡布移民の時代。

呼寄移民時代：明治40年(1907)から移民が禁止されるまで。日米紳士協約(1907)が成立し、米国移住が制限され、近親者の「呼寄せ」だけに制限された時代<sup>2</sup>。

移民禁止時代：大正13年(1924)以降。排日移民法(1924)により、日本人移民が全面的に禁止された時代。

[[初代同胞時代の分析]『ハワイ日本人移民史』(1964:119)をもとに加筆修正]

1 ハワイの「太平洋の楽園」としてのイメージ形成、および、「楽園」のイメージが戦後の観光開発に与えた影については、山中(1992、1993、1996、2002他)が詳しく論じている。

2 新規移民が制限されたため、「picture bride(写真花嫁)」の渡布が盛んになった。ハワイ在住の独身男性と日本在住の女性の間で写真を取り交わし、話がまとまれば日本で入籍させ、ハワイに呼寄せた。

## 2. ハワイ併合前後の観光業

今日、観光客であふれるワイキキには、かつて先住民による水田やタロイモ畑が広がり、あちこちに養魚地が築かれていた。ハワイの観光業の始まりは、船乗りや一部の訪問客用に数軒のホテルが建てられた1830年代にさかのぼる。しかしそれも、ハワイと米本土間の定期船の就航(1867)までは目立つほどでもなかった(河田:52)。1872年にハワイで最初の高級ホテル「ハワイアン・ホテル」が開業し、翌年にはワイキキに別館が増設されるなど、少数の賓客向けの観光施設ができたものの、それから約25年間、ハワイへの訪問客数は毎年約2,000人の横ばいであった。Crampon(1974:25)は、盛んに交易が行われた1870年頃までと比較し、1870-1900年を観光業の「Doldrum Days(不振の時代)」、本土からの裕福な白人客が増加した1900-1930年を「Carriage Trade Days(上等顧客の時代)」と呼んだ。

1901年に大型の高級ホテル「モアナ・ホテル」が開業し、1903年には「Hawaii Promotion Committee(ハワイ宣伝委員会)<sup>3</sup>」が設置され(河田:53)、1918年までに、ハワイへ8,000人以上の訪問客が訪れていた(Crampon:26)。しかし、その頃のワイキキはいくつかホテルが建てられたものの、まだ養魚地、タロイモ畑、水田が散在する景観が残っていた。ワイキキの本格的な開発は、アラワイ運河が建設された1920年代中葉のことであった(Crampon:26)。ハワイ宣伝委員会の予算をみても、委員会設立当初は宣伝費にもあまり多くの投資をしておらず、積極的ではない(日本交通公社企画室1955:17)。

1925年には世界最大の豪華客船が就航した(山中2002:155)。さらに、1927年にはワイキキの開発工事が終了し、同年、超高級ホテルの「ロイヤル・ハワイアン・ホテル」が開業した。1922年には9,600人程度だった訪問客は、29年には2万人を超え、1920年代は高級リゾート地としての成長が著しい(河田:54)。その後、世界恐慌の煽りを受けてハワイの観光ブームはいったん下火になるが、航空便の就航や軍人たちの来布により、ふたたび戦前ハワイの観光産業は潤いを取り戻していった。

3 1910年に「Hawaii Visitors Bureau(ハワイ政府観光局)」に受け継がれた(運輸省観光課1951:23)。

## 3. 「元年者」(がんねんもの)がみたハワイ(1868年)

明治元年(1868)、150人<sup>4</sup>(男144名、女6名)の「元年者」を載せて横浜港を出発したサイオト号(The Scioto)は、34日間の航海の後、ホノルルに到着した(山下1968:39)。移民総取締の牧野富三郎が横浜在住のヴァン・リードに送った書簡から、船中、および、ハワイの様子を見てみよう。

先頃日本を出帆せし雇夫たちは、つつがなく、布哇に到着し、土人共もいたって親切に世話いたし、上陸のせつは雇夫銘々へ帽子衣服などをあたへ、食物、住宅、薬湯の心付ゆきとどき…(略)

幸便にて啓上仕候、就は私はじめ一同のもの、去ル四月二十五日夕刻横浜出帆、海上三十五日相掛かり、無難にて布哇城下、ホノルル港へ安着仕候、船中にて早速手分け相成り、マウエ島又は「ハワイ」「ラナイ」など申所へ三十人又は十人位づつ罷越申候…(略)尤も着岸の節より船中にいたるまで、食料等ことの外丁寧にて、一同之手当向行とどき、日本にての御はなしよりは余程よろしき城下にて、大悦罷在候一、船中にて船気のもの随分御座候得ども、いづれもさしたる事に無之、四番の小頭和吉と申者、至極のよき人物に候処、大病相成、四月十六日死去いたし、歎敷次第に御座候、外の者は別状無之候

一、当地は随分熱国にて、日本の大暑寒暖計(六十八より八十六位迄)位之時候にて、昼中は冷水もぬるま湯同様に御座候、尤年中草木の葉落散不申、霜雪もふらず、水瓜、マンゴ果、林檎、葡萄、桃など、年中相断へ不申、住居よき処に御座候

一、昼夜とも酔狂人、乱暴人など、老人も往来不仕、人気もいたって穩にて、一同大仕合候…(略)

[下線部は引用者による。以下同じ。(山下1968:37-38、所収)]

長い航海中に体調を崩す者や死亡者(和吉)も出たが、他の者はなんとかハワイに無事に到着した。彼らは、現地の人々(土人)から親切なもてなしを受けている。船中で移民を10-30人位ずつに分け、マウエ島、ハワイ島、ラナイ島などの就労先に配属した。出国前に日本で聞いていたよりも、ハワイは「余程よろしき城下」であり、大変喜んでいる様子がわかる。ハワイは「熱国」で、果物も豊富な「住居よき処」。乱暴者なども一人もおらず、人々が穏和で、「一同大仕合」と、大満足の様子であった。到着直後の富三郎のみたハワイの印象は、南国、親切な人々、生活しやすい、よい所、である。この頃は、まだ観光開発や近代都市

4 渡航者名簿の記録から153名とする説もある。

化が進んでおらず、のんびりとした南国の島というイメージであった<sup>5</sup>。

#### 4. 第一回官約移民（以下、「第一回移民」）のみたハワイ（1885年）

第一回移民<sup>6</sup>募集時に配布された「出稼趣意書（心得書）<sup>7</sup>」には、現地の様子が次のように説明されている。

布哇国と云ふ処は日本の横浜より米国の桑港に至る船路の中央にて稍南方に偏在し八の大なる島より成立たる「サントウキチ」島の内にして人の数は其土地の人と外国の人とを合して凡そ七万二千人程ある所の王国なり又「ホノル、」と云ふ処は此国の内にて最も互市貿易の盛なる港なり日本の横浜より「ホノル、」港迄は海上里数凡そ千三百五拾里なれば同港迄の航海日数は十二三日掛るべし…

該国の気候は通例四季とも温暖にて寒中も華氏の寒暖計五十度を降る事なく暑き時とても凡そ九十五六度を超す事なし…

該国の人情は誠に真実温和にて外国人を取扱ふ事至て親切なれば是迄已に渡航し居る日本人も更に帰国の念を起さざる由

言語は該国の言葉もあり又英国の言葉もあれと出稼人は日本の言葉のみにて少しも差支る事なし…（略）

〔明治17年（1884）12月中旬、久賀村戸長役場文書（土井1980：24-26、所収）〕

上記の心得書には、ハワイが横浜とサンフランシスコとの中間であること、8つの大きな島からなること、「其土地の人」と「外国人」を合わせて約7万2千人の王国であること、ホノルルが商売盛んな最大の都市で横浜から12、3日かかることなどが記されている。「元年者」のときの様子と比べると、大きな変化が見られる。一ヶ月以上かかった船旅が大型船の就航により大幅に短縮され、ホノルルが活気のある都市に成長している。また、現地に住む人々には、先住民のほか、「外国人」の存在も目立っているが、ここでいう「外国人」には、白人も含まれている。一年を通じて温暖

な気候、「真実温和」で親切であることは変わっていない。現地の人々は外国人への対応にも慣れてきているようだ。先住民の言葉のほか、英語も使われているが、出稼人は日本語だけでも少しも差支えない。

第一回移民を載せた東京市号（シティ・オブ・トウキョウ）は、明治18年（1885）1月27日に横浜を出港、2月8日朝にホノルルに到着した。出稼人たちはホノルル滞在中、移民収容所で過ごしたが、彼らは現地の人々から歓待を受けた。カラカウア王自らも収容所を訪れ、彼らのためにフラ踊のショーを催させた。また、それに対して、出稼人たちも相撲や剣術、踊りなどを披露している（藤井1937：上巻、31）。フラの伝統は、かつて白人宣教師たちに抑圧されたが、1870年代、カラカウア王によって再興された（矢口2002：210－211）（図1）。王自身の即位式を機に、儀式のたびに演じられていたが、その様子は出稼人たちへのもてなしからも読み取れる。また、王をはじめ、現地の人々が日本人に好意的であったことがよくわかる。

同船で赴任した初代ハワイ領事中村治郎は、在任中、出稼人の様子を吉田清成外務大輔に計四回報告した。明治18年（1885）3月11日付の報告書には、出稼人らが関心を持ったホノルルの様子が描かれている。

我渡航人民ハ随意ニ市街ヲ歩行スルノ自由ヲ得ルヲ以テ各十人或ハ二十人ノ組合ニテ諸所ヲ遊覧シ隅々大厦ノ前面ニ至レハ敢ヘテ憚ル所ロナク其門扉ニ佗立シテ内部ノ裝飾等ヲ仰視スレハ其家ノ主人ハ反テ懇ロニ誘導シテ室内モ縦覧セシムル等ノ事ハ往々目撃スル所ニシテ彼ノ「ハワイアン・ホテル」ノ如キハ恰モ博覧会場如ク足駄草鞋草履小間下駄靴等ハ階下ニテ之ヲ脱シテ之ヨリ一言モナク単ニ稽首ノ一礼ヲナシ其儘



図1 Hula Dancers（1883）

白人宣教師たちによって抑圧されたフラは、1870年代にカラカウア王によって復興し、儀式や客人のもてなしの際に演じられた。

（Hawai'i State Archives）

5 配属された島での労働が始まると、炎天下での不慣れな農作業、契約内容との相違、劣悪な就労環境、農園主や現場監督者の移民への虐待から、自殺者も出た。彼らのうち40名余りは、移民への処遇や困窮状況を知った明治政府がハワイ側に交渉し、契約期限前に日本に帰国させたが、多くはそのままハワイに残った。

6 同船で赴任した中村領事の報告によれば、944人（男性676、女性160、男児68、女児40）だが、953人、948人など諸説ある。渡航を取消したり、ホノルル上陸前に逃亡したことが推測できる。

7 この頃の移民たちは「出稼人」、「出稼渡航人」と呼ばれていた。彼らの目的はあくまでも出稼ぎであり、移住目的ではなかった。

二階三階ニ昇降スルモ亦敢テ之ヲ咎ムルモノナカリシハ又以テ我人民ヲ好ムノ一端ヲ知ルニ足ルヘシ  
 [ハワイ領事 中村治郎から吉田清成外務大輔に宛てた報告書 (土井：97-98、所収)]

彼らは市街を自由に散策することができ、10 - 20人単位で市内見物（遊覧）をしたが、西洋風の大きな屋敷が相当珍しかったのであろう、室内装飾を仰視していたところ、その家の主人が彼らを室内に招き入れ、縦覧させている姿が目撃されている。「ハワイアン・ホテル」（図2）においては、草履・靴等を脱ぎ、無言で一礼すると、勝手に館内の見学をしている。しかも、それらの行動が「我人民を好む」ホテルのスタッフたちの厚意により、黙認されていたというから面白い。ハワイアン・ホテルは、ホノルルで最も早く開業した高級ホテルだが、第一回移民が到着するよりも前に、「元年者」として渡布した出稼人3名が、プランテーション労働の契約満了後、このホテルで働いていた<sup>8</sup>。

第一回移民がみた1885年のハワイは、「元年者」が到着直後に感じた、温暖な気候、親切で温和な人々、という南国的なイメージだけでなく、豪華ホテルや西洋の邸宅といった白人の生活がハワイ文化の一部と化したものだった。しかも、それら白人の文化は「遊覧」の対象となっていた。ハワイに住む外国人の存在も目立ち、商業の中心としてのホノルルの都市化、国際化が進んでいた。また、「フラ踊」が客人をもてなすショーとして利用されるなど、「元年者」の時期に比べて、ゆっ



図2 Hawaiian Hotel (1890)

ハワイ最初の西洋式高級ホテル Hawaiian Hotel。1872年開業。  
 (Hawai'i State Archives)

8 石村市五郎、宮崎初吉、福村豊吉の3名。豊吉は、ホテルによく酒を飲みに来ていたルナリオ王が酪酊した際、王を背負って王宮に送り届けたという（渡辺1986：360-361、366）。

くりではあるものの、ハワイの観光地化が進行していた。しかしながら、白人はあくまでもハワイにとっての「外国人」であった。渡航面においては、このときまでに日本からの大型船が就航し、大量の移民を送出できる状況となり、渡航に要する日数も大幅に短縮されていた。

## 5. 渡航案内書にみるハワイ

### (1) 『日本ト布哇』(1894年) 一王国崩壊後のハワイ

#### ①ハワイの風土 (p. 96 - 115)

本書では、「楽園」のイメージが排除され、南国らしい情景が描かれていない。地域によって気候や湿度、風土が異なるなど、「布哇群島ハ処ニ依リテ同シカラズ」(p. 100)と、ハワイ全土を一括りにすることなく、地理的事実を客観的に述べている。また、ハワイ王国が崩壊したことを受け、日本人は、それまで友好的だった現地の人々を見下すようになった。

「土人」は、南洋的な、温和で親切な存在でもなく、観光の対象でもない。たとえば、かつて彼らが生活していた特徴的な家屋については「此種ノ家屋ハ山間僻地ニ見ルノミ通常ノ土人ノ家屋ハ西洋風ノ小屋トモ云フベキ木造ノ白ク塗リタルモノ」と説明する。(p. 115)。「観る」べき対象ではないのだ。「フラフラ踊」については、神に捧げる目的のものもあるが、「大半ハ下劣ナル動物的ノ情ヲ楽シマシムル目的ニシテ歌ノ如キハ猥褻聞クニ堪ヘサルモノ多シ」(p. 112)と酷評する。彼らの人情については「野蛮人」、「犷猛」、「残酷」、「残酷」で、政治能力にも乏しく独立の精神がない、財政を管理する知識がないなど、侮蔑するばかりである (p. 113-115)。興味深いもの、あるいは、観光の対象として彼らをとらえることもなく、ただ野蛮で見下すべき存在としてとらえている。ハワイ王国、先住民に対し、日本人の意識が大きく変化したといえる。また、王国崩壊により、それまでハワイ王国と明治政府間の契約によって組織されていた「官約移民」は廃止され、以後、民間会社による「私約移民」の時代となる。

9 22銭。自由主義者の有志団体「愛国同盟」によるもの。愛国同盟は、王国崩壊後の革命に乗じて現地日本人に参政権を獲得させようと、ハワイに同盟員4名を現地調査に派遣した。本書は彼らの帰国後の報告をもとに、米文学士の外山義文が編集したものである。革命前後の様子や、日本人が参政権をとるための方策などが中心だが、後半部にはハワイの「風土及沿革」など現地の一般的な情報が掲載されている。

(2) 『新布哇<sup>10</sup>』(1900年) — 私約移民のみたハワイ

## ① 「太平洋の楽園」

一たび其足を金剛峰の緑を□せるホノルル湾に□いで如何に造化の奇工がこの群島に注がれしかを見よ、縮れし髪に青玻璃張りし唐人の眼にも太平洋の楽園として喚はるる布哇まいてや敷島の日本男児が風流眼には□と世界の蓬萊島とも見えざらましや・・・(略)キラウエアの火山は布哇第一の名勝にして世界に於いても其壯と美とは比類を觀ざる所なり是を以て英、濠、米、亜等より遙に來つてこれを觀るもの甚だ多し為に火山街道は設けられ火山旅館は築かれたり亦以て火山が太平洋の楽園に眼晴たるの所以を知るべし (p. 2-4)

ホノルルとハワイ島の自然の美しさ、珍しさを称え、ハワイを「太平洋の楽園」として描写している。このときすでに、「布哇第一の名勝」のキラウエアには、世界各地から観光客が訪れていた。「火山街道」や「火山旅館」が築かれ、観光地としての整備が行われていた。

「ホノルル府」については、「金剛岬」(ダイヤモンドヘッド)をはじめ、「タニタラス峰」、「カアラ峰」「ポンチボール」(パンチボール)など、「市街の繁華と海の光洋は直に人の心目をして悠然たらしむるに足る」、「山水明媚」などと説明している。「太平洋の楽園」と称える一方で、「日本を出つる時は皆血色紅を帯ひしものが一たび布哇に至り留まると六七ヶ月に至れば顔色土の如く皮肉漸く落ち気力漸く減退の傾あり」(p. 22) というように、四季の変化に富んだ日本からの移民にとって、ハワイの気候が必ずしも合うわけではないことを述べている。本書は、これから渡布する人々やハワイ在住邦人を対象としているため、風土を絶賛するばかりではない。

同様のことが「渡航心得」からも読み取れる。各地で移民募集する際、渡布後に後悔することのないよう誇大に吹聴するよりも、真実を伝えようとしていた(p. 598)。本書には、ハワイ在留邦人たちから寄せられた川柳も掲載されていた(p. 646-647)。

太平洋の楽園に居ながら溢す愚痴  
布哇から西方浄土は日本だろ

10 著者の藤井秀五郎は1897年に渡布。『ヒロ新聞』の主筆記者となり、『新聞日本』の特設通信員を兼務した。昭和12年(1937)には、海外調査会発行の『大日本海外移民史』を著す(藤井1937:附記1-6)。1900年当時、日本人によるハワイ案内がほとんどなかったことから、藤井は「布哇在留同胞」、日本にいる「布哇関係者」および「布哇に渡航せんとするもの」のために本書を執筆した。

布哇の地唯海山と甘藷ばたけ

「楽園」と呼ばれているハワイも、住めば愚痴があふれてくる。美しい自然景観も、実際にはただ海山と甘藷畑が広がるだけである。「西方浄土」は、ハワイではなくむしろ日本のようだ。到着直後に、見て、感じるハワイは「太平洋の楽園」かもしれない。しかし、しばらく滞在して現実を見渡してみると、もはやそこは楽園ではない。渡航の際は、そのことを覚悟の上で決断すべきである。このように、短期間の旅行者と、出稼ぎ目的の渡航者に向けて、双方の視点で憧れと現実のハワイを説明していた。

## ② 著名な建築物

本書には「名所」や「名勝」といった項目がなく、「公園他著名の建築物」として、「カピオラニ公園」、「演劇場」、「オアフ監獄所」、「兵營」、「アイウラニ宮殿」(イオラニ宮殿)、「政庁」、「エマ女王病院」、「ルナリロ救助院」、「ホノルル図書館」、「イーグルハウス<sup>11</sup>」、「アーリントンホテル」、「ハワイホテル」(ハワイアン・ホテル)、「サンスーシー旅館」、「クイン旅館」、「カウマカピリ寺院」、「カワイハウ寺院」、「ユニオン寺院」、「カメハメハ大学校」、「ビショップ博物館」、「汽船会社」、「塩湖」が列挙されている。興味深いことに、紹介している21の施設中、ホテル(旅館)が5軒を占め、寺院3軒、汽船会社までもが、カピオラニ公園、イオラニ宮殿、ビショップ博物館、塩湖等と同列に並べられている。それは、本書の読者が、これから渡布する人々だけでなく、ハワイ在留邦人も包含されているためであろう。観るべきものと、利用できる場所とが混在している。

## ③ 日本人経営の宿 (p. 613 - 615)

明治32年(1899)のホノルルには、日本人経営の宿屋として、九州屋、福岡屋、水羽屋、大嶋屋、廣島屋、熊本屋、川崎屋、芸州屋、布哇屋、中国屋、柳井屋の11軒があった。これらの宿は、板床の上にゴザを敷き詰め、その上に毛布一枚と蚊帳があるだけの簡素な共同部屋で、賄付で一人一泊40セントであった。中等以上の宿にはシングルルームもあった。上等客はたいてい白人向けのホテルに滞在していた。明治33

11 ヌアス街の中等旅館。

年（1900）には、これら11軒からなる同業者組合が組織されたが、経営者はもともと一儲けしたら帰国するつもりでいたため、施設にはあまり投資をしていない。また、客層のほとんどが労働者であることも設備に投資をしない理由の一つでもあった。

一方、安宿には我慢できず、ホテルは高すぎて泊まれないという客には、白人の家でのホームステイという選択肢もあった。室料のみで一週間2-6ドル程度。食事は外食（洋食一食25-50セント、和食15-25セント）するというものであった。

#### ④「現地の人」の変化

この頃、かつて「外国の人」であった白人と、「現地の人」であった土人（先住民）の立場が転換する。土人はホノルルで「花環（レイ）」を白人に一個20セントから1-2ドルで販売している（図3）。すでに先住民の文化は「奇習として見るべき」（p. 239）と、彼らの文化の観光化が進んでいた。Trask（1999: 136-147）が嘆く、観光客向けの先住民の伝統文化の身売り（the Prostitution of Hawaiian Culture）が、着々と進んでいたのである。

また、本書の巻末には英会話の文例が掲載されている。かつては「日本の言葉のみにて少しも差支る事なし」としていたが、公用語としての英語が定着し、日本人にも英語の学習を勧めていたのである。

#### (4) 『米国布哇渡航問答』（1902年）－自由移民の見たハワイ①－

##### ①本書の概要

渡航者のための参考となるべき情報を「問答」として記し、読者に解り易く説明している。「自由移民」を対象に、彼らの利便を目的としたものであり、客観的事実のみを記述している。現地風土に関する記述は一切なく、「楽園」イメージも感じられない。米国によるハワイ併合（1900）以後、それまでの労働契約は無効となり、「契約移民」の渡航が禁じられ、契約移民として就労していた労働者たちはその契約から解放された。「自由移民」は、本人が初めから自由に就労先を選ぶことができた。中には「スクール・ボーイ」として白人の家に住み込みで働きながら通学する者もいた。「スクール・ボーイ」のシステムはそれ以前からもあり、日系二世も利用していたが、自由移民の時



図3 Lei Sellers（1901頃）

先住民の伝統文化の一つであったレイが、観光土産として売られている。

（Hawai'i State Archives）

代以降、ハワイは、海外留学を夢見る若者にとって、今日の「ワーキング・ホリデー」の目的地のようになった。また、この頃、ハワイから米本土へ渡る日本人も増加した。契約労働から解放され、渡布直後から職業選択の自由が与えられたことで、安易な気持ちの渡航希望者が増加したのである。本書では、渡航希望者への指導書であると同時に、渡航をよく考えるよう指導している。初志を貫徹せずに不幸に陥ることのないように、生半可な気持ちで行くつもりなら渡航をあきらめたほうがよいことを問答形式でわかりやすく説明している。

##### ②宿屋案内

『新布哇』が宿泊施設の設備について詳しく説明しているのに対し、本書では設備内容については一切触れていない。日本人旅宿では「渡航者の希望に任せ仕事の紹介を周旋するを常とせり依りて之等用意の爲め」（p. 44）と、米本土とハワイにおける日本人経営の宿名と場所のみを掲載している。ハワイについては、西村旅館、福岡屋、米屋の3軒を挙げたに過ぎない（p. 46）。『新布哇』の読者であった「契約労働者」には仕事探しの必要はなく、彼らにとってのホノルル滞在は、最終目的地（契約先の農園）に向けて出発するまでの船旅の疲れをとる期間であった。従って、日本人経営の宿は簡素で真の疲労回復には向いておらず、金銭的な余裕があるならばホテルや西洋人宅の間借り（ホームステイ）を勧めていた。それに対し、本書の主な読者は、これから「自由移民」として渡航する人々である。「自由移民」にとってのホノルル滞在は、仕事探

しをする期間でもあった。そのため、宿泊施設としての設備内容よりも、宿の経営者が就職の斡旋をしてくれる日本人であるか否かの方が重要であったのではないか。

#### (5) 『最新正確布哇渡航案内』(1904年) — 自由移民の見たハワイ②—

##### ①本書の概要

著者の木村芳五郎は、明治27年(1894)に渡布。32年(1899)よりキリスト教の伝道師となった(『新布哇』: 附録67)。本書も、自由移民対象にしたもので、特にハワイ上陸までの注意事項や現地での生活に関する情報が多く掲載されている。同時に、本書は、それまでに発行された案内書よりも観光向けの要素が多く含まれている。「布哇航路略図」やハワイの地図のほか、「日本帝国総領事館」の大きな写真、葬式図、日本人学校、サトウキビ農園で働く日本人労働者の姿など、日常生活を示す写真も多いが、カメハメハ大王像のようにハワイ観光の象徴的な写真も掲載されている。また、「土人の常食」、「土人の婦女」等、エキゾチックな「土人」の日常や、「土人の婦女フラフラ踊り」のように観光的に作り出された「太平洋の楽園」を連想させる写真も掲載されている。

本書は、上・中・下篇に分かれ、本編全192頁、付録26頁の構成。「上篇」は全47頁で、出国前の渡航準備からハワイ上陸までの様子、手続きの仕方、注意を詳細に述べている。「中篇」は全54頁で、オアフ島ホノルル市とハワイ島ヒロ市の概要と、商店、サービス、各種施設など、そこで生活していくために必要な情報を掲載。「下篇」は全92頁からなり、ハワイの歴史・風俗・システムが書かれている。巻末には26頁からなる「附録」として、海外旅券規則や、米国の条例、各種届書等の説明と様式が掲載され、最後に13頁分の広告がある。

当時、「布哇の栄枯盛衰は一に本邦移民の掌中に存する」(まえがき)というように、ハワイにとって、在留邦人や日本との結びつきは重要なことであった。しかし、それにも拘わらず、政府関係者、移民業者、「布哇通」を自認する人々にすら、ハワイの現実が知られていなかった。古い情報しか持ちえないまま「十年前の布哇を夢みて」「雲を攫む如き空想を懐いて来航するもの」や、入国審査時に余計なことを口走ったばか

りに上陸拒否をされて帰国せざるを得なかった者が少なくなかった(自序 p. 2-3)。そのため、「正確の上にも正確を期せん為め、著者近頃各島を巡視し、審査に審査を加へた」というように、本書は、長年ハワイに住んでいる著者が、これから渡布する者のために執筆したものであった(自序 p. 3)。ハワイの印象に関係する「中篇」と「下篇」を見ていこう。

##### ②国際都市ホノルル(「中篇」から)

到着して第一に目のつくのはなんであるかと申しますれば港の良いことにて幅は広く水は深くしていかなる大船巨船でも一々棧橋に横着するを得、其の上風波も立たず其のまま静穏なる事まるで盪の中を見る様で日本などにはとても見るのできない天然の良港である、それから市中に上陸して目に留まるものは市街の奇麗な事でありませう、著者は子供の時から旅から旅と鳥の様に飛び回り、東京にも長らく暮らしたのであるから、布哇と一口に見下げて居たが来てみれば予想とはまるで違ひ、街路も廣く人道車道の区別整然として立ち中央は車道とて馬車や自転車のみ通り徒歩する人は皆両側の人道(之をサイドウォークと云ふ)のみを通行することになっている 家屋は煉瓦石造多く、商店の飾付中々奇麗に凡ての様子が秩序整然たるには一驚を喫したのである、市中の住宅には樹木多くまだ一度も見たことのない椰子樹や扇樹や名も知らぬ樹木生ひ繁りて緑翠滴るがごとく庭園は青草を以てブランケットを敷き連ねたるが如し中にもバンシャナ、ジョージナと云ふ樹は真紅の色を青雲に染め出し美観言ん方なし、誠に市の中央なる旧政庁の公園に歩を移して緑陰涼しき所、自由椅子に腰をおろせば、紅白様々なる花卉満庭に咲きこぼれ、其間白衣の美人共悠々逍遥するを見れば伝へ聞き蓬萊島や龍宮世界の思やられて詩情湧くがごとく、陶然として華胥の国に遊ぶが如き感がある (p. 48-49)

ここで面白いのは、著者はいわゆる「太平洋の楽園」としてのハワイよりも、西洋的な、白人がもたらした近代的なハワイを絶賛している点である。日本人がおそらく珍しいと思うもの(すなわち、著者が「良い」と感じているもの)として、ホノルルの「天然の良港」と市街景観(「市街の奇麗な事」)を挙げている。目に留まる市街景観とは、整然とした道路、煉瓦石造の家屋、整然とした商店の飾付、市中の住宅(それに伴う庭園)、旧政庁の公園である。庭園を彩る南国の樹木の美しさを述べつつも、著者が賞賛しているのは、あくまでも近代的な整然とした市街景観である。また、「蓬萊島や龍宮世界」のようだと絶賛しているのは、花に囲まれた旧政庁の公園で「白衣の美人」を見た

きである。夢心地の世界に導くのは西洋人女性であり、「土人」ではない。著書は同書で「窈窕たる白婦人楚々として歩むかと思へば銅色肥満の土人は裸足にてノサリ、と揺るぎ出し…」(p. 114)と表現していることから、「土人」に向けるまなざしは、珍しいもの、奇妙なものとしての、観光対象に向けるものといえる。しかし、それは土人だけが珍しいのではなく、他民族が共存する国際的な都市の一面としてである。それは他民族に関する記述に見られる。

魔の追従を暗まさんとする黒人あり、其面青黒く浮ばぬ亡者の如き観あるは西米戦争の結果西班牙の羈絆を脱して米国の一領土となりし布哇の厄介者泥棒の専門家ポルトリコ人なり、日蔭の草の如くヒロヨ、腰にて頭から尻尾を垂れたる支那人あれば口あんぐりと首を横に向けて市中を通行し行人に突き当り頭を搔きて赤恥晒す日本人もあり…(略)、其状恰も走馬灯の如く人間の博覧会の如く日に奇々妙々の感あり…(p. 114-115)

この後に、「ヤンキーの子供」や「朝鮮人」について記されるが、日本人自身をも含め、いずれの人種に対しても小馬鹿にした表現である。著者が見たハワイは、ゆったりした未開人が生活する「楽園」というよりも、西洋人の作った近代的な都市であり、且つ、世界中の様々な人種が集結した「人間の博覧会」、いわばテーマパークのような都市であった。かつて、「元年者」が上陸した際には、彼らは西洋人の邸宅や商店、ホテルを物珍しく眺めていた。それから20年弱の間に、都市の近代化はさらに進んだ。それと同時に、契約を満了した、出稼人たちが都会に集結したこと、さらには「自由移民」の時代となり、初めから都市部に住み着く人々が増えたことで、多くの人種が集結し、国際化・テーマパーク化が加速した先駆的な都市になっていた。

### ③遊覧都市としての整備（「中篇」から）

ホノルルには電気鉄道も敷設され、距離無制限で片道5セント。市北部カリヒから出て、リリハ街にて2線に分かれ、南方ワイキキと東部のパシフィックハイトが結ばれていた。パシフィックハイトの鉄道は、30分毎に丘の上まで電車2台で「単に同丘遊覧者の便を図るために昇降していた。頂上からの見晴しもよく、休日には遊覧者で混雑していた(p. 51-52)。

宿屋組合に加盟している日本人経営の宿屋は、肥後屋・九州屋・熊本屋（熊本県）、川崎・米屋・柳井屋（山口県）、水羽屋原本旅館・新潟屋西村旅館・山城屋・泉屋小林旅館（広島県）、および、福岡屋（福岡県）の11軒、この他、小松屋・神州屋（広島県）があった(p. 54)<sup>12</sup>。宿屋組合加盟会員は、乗船切符購入の際に汽船会社代理店から手数料収入を得ることができた。当時の日本宿は、「気の利かない木賃宿同様只寝させて食はせるのみ」(p. 55)の場所で、一部屋に客を入れるだけ詰め込み、蚊帳一張と丸太を切った枕を貸し出すのみ。食事は鈴の合図で食堂に集合し、お茶を飲むのも食事時に限られていた。次々と日本からの移民が訪れるため、日本人経営の宿屋は盛況であった。この頃も、経営者は宿の設備にあまり投資をしていない。宿泊代の相場は、一日三食付で50セント。寝具付のシングルルーム（特別室）の場合は同じ食事内容で75セントであった。

西洋式ホテルについては、この頃までに前出のモアナ・ホテル、ハワイアン・ホテル、そして、ヤングホテルの3軒が日本人の間でも「一等旅館」として認識されていた。ワイキキには、これら一等のホテルのほかにも、「二等旅館」や「部屋貸し」も多くあった。「市街の紅塵を避け、静粛にして眺望に富める所に海水浴場の設けあり、浴衣を与へ日本流の料理供へる等、恰も日本内地に於けると同様の感あれば、市内の紳士紳商等は暑を此地に避け、鬱を散するを常とす」(p. 55-56)というように、ワイキキは裕福な日本人の避暑地でもあった。望月・東洋館・とかし、の3軒の日本式「海水浴館」(リゾートホテル)も建てられ(p. 56)、ワイキキは西洋人だけではなく、一部の裕福な日本人向けのリゾート地にもなっていたのである。

本書では、自由移民を読者対象としているため、名勝地や遊覧箇所のような項目は設けておらず、ホノルル市内の施設については、官庁や銀行などと並べて、「ビショップ博物館」と「公園」(カピオラニ公園・マツキンレイ公園・トマス公園・エンス公園・アーラ公園・モアナルア別荘)を掲載したにすぎない(p. 74)。今日のモアナルア公園は、「モアナルア別荘」として、「富豪サム・デーモン氏の別邸のあるところにて公園に類したるものとして遊覧者多し」(同上)と説明されている。

12 「新布哇」(1900)には掲載されていない宿を斜体で表記した。

ヒロ市に関する情報は、サトウキビ農園で働く労働者向けのものばかりで、遊覧に関する情報はほとんどない。十数年前に比べて急激に街は都会化した、海岸沿いに一大公園が建設予定などで、「風光頗る愛すべし」と表現されている。また、すでにサンフランシスコとの間に定期直航汽船があること (p. 86)<sup>13</sup>、又野屋・熊本屋・沖野屋の三軒の日本宿のほか、西洋式ホテルがあることなどが記されていた (p. 87)。

#### ④ハワイの風土(「下篇」から)

ここでは、歴史、地理、動植物、衣類、食べ物、言語といったハワイに関する事実や、教育、郵便、裁判、婚姻等、生活に必要なことを淡々と記述しているだけで、「気候」の項にも楽園を意識したような言葉はない。ハワイ先住民についても、他の民族の説明と同列に並べている。ハワイは「殆ど世界のあらゆる人種を集め」、「其状恰も走馬灯の如く人間の博覧会の如く實に奇々妙々の感あり」と記されている (p. 114-115)。民族のテーマパークのようなイメージは、「中篇」同様である。

本書冒頭では楽園を連想させる「土人」の写真が数枚あったものの、本文では特に「土人」の風俗については触れておらず、南洋のゆったりしたイメージというより、著者はハワイを近代的な国際都市ととらえている。

### 6. むすびにかえて

以上、王国の時代から、共和国、米国による併合後のハワイの様子について、日本人が抱いた印象を見てきた。そこでわかったことは、ハワイの政治的、社会的な背景が、都市や、そこで生活する人々のイメージに大きく影響していることである。

王国時代のハワイにおける「現地の人々」とは、いまでいう先住民のことであり、日本人が見た彼らは、温和で親切な存在であった。ゆったりとした南国、楽園に、「外国人」としての西洋人の近代的な生活が混在していた。ところが、白人勢力による王国崩壊後、日本人は「現地の人々」を野蛮な土人とみなすようになった。おそらく、西洋人が彼らに向けるまなざしは、王国時代も共和国への移行後も変わらず未開の野蛮な

土人であっただろう。白人支配後、日本人が彼らに向けるまなざしは、西洋人のそれに同化していくのであった。それまで出稼人にとってのハワイは日本語だけで差支えなかったのに、「外国語」であったはずの英語が公用語となり、出稼日本人も英語を学習するようになった。

併合後、ハワイの観光化が進むと同時に、日布間の契約移民制度が廃止され、自由移民の時代が始まった。すると「スクール・ボーイ」の存在に見られるように、ハワイは、アメリカ文化を持つ「留学先」としても考えられるようになった。また、自由移民の時代に移る前後から、次第に日本語の渡航案内書が多く刊行され、そこには、ただ楽園的なイメージの記述ではなく、具体的な観光情報が少しずつ掲載されるようになった。日本人移民が増加したことで、日本人経営の宿屋が盛況を迎えるが、多くは労働者向けの安宿で、ほとんど設備投資されることなく、簡素なままであった。その一方で、裕福な日本人向けの施設も建設され、一部の富裕な日本人は、西洋人同様、ワイキキのリゾート生活を堪能していた。また、この頃までには、日本人にとっての「土人」は、多民族が集結した国際都市のなかの一民族という側面と、観光の対象としての二面性を持っていた。

従来、ハワイの観光リゾートとしての研究は西洋人の眼を通したものが中心であったが、本稿では、日本人移民の視点からハワイの印象、観光地としての変化を論じてきた。今回は、ハワイ併合後の自由移民の時代までを対象としたが、今後は「非移民」から見た戦前ハワイの研究につなげていきたい。

本稿は、拙稿(2012)の一部を大幅に加筆修正したものである。

#### 【参考文献】

- 運輸省観光課編(1951)「ハワイの観光事業」『国際観光』3(5)。  
 河田潤一(1992)「ハワイにおける観光業の展開と行方」『甲南法学』甲南大学法学会、32(3・4)。  
 木村芳五郎・井上胤文(1904)『最新正確布哇渡航案内』博文館。  
 工藤泰子(2012)「明治期日本人移民のハワイ渡航」『第

13 このころ、在布日本人が米本土に転航するだけでなく、日本から米本土への渡航許可が入手しにくかったため、手続の簡単なハワイにいったん渡り、数か月内に米本土に転航する者も多かった。

- 27 回日本観光研究学会全国大会学術論文集』  
 外山義文編 (1894) 『日本ト布哇 (一名) 革命前後之  
 布哇』博文館蔵版。  
 土井彌太郎 (1980) 『山口県大島郡ハワイ移民史』マ  
 ツノ書店。  
 日本交通公社企画室 (編) (1955) 「ハワイ観光事業振  
 興 10 ヶ年計画」『国際観光情報』93、1-30。  
 ハワイ日本人移民史刊行委員会編 (1964) 『ハワイ日  
 本人移民史』布哇日系人連合協会。  
 藤井秀五郎 (1900) 『新布哇』大平館。  
 (1937) 『大日本海外移住民史 第一編 布哇  
 (上・中・下巻)』海外調査会。  
 矢口祐人 (2002) 『ハワイの歴史と文化』中公新書  
 1644。  
 山岸幹 (1902) 『米国布哇渡航問答』寶文館。  
 山下草園 (1968) 『「元年者」のおもかげ』日本ハワイ  
 協会発行。  
 山中速人 (1992) 『イメージの<楽園>』筑摩書房。  
 (1993) 『ハワイ』岩波新書 291。  
 (1996) 「メディアと観光」山下晋司編 『観  
 光人類学』新曜社、74 - 83。  
 (2002) 「『楽園』幻想の形成と展開」春日直  
 樹編 『オセアニア・ポストコロニアル』国際書院、  
 143 - 191。  
 渡辺礼三 (1986) 『ハワイの日本人日系人の歴史(上巻)』  
 ハワイ報知社。  
 Crampton, L. J. (1974) "Hawaii's Visitor Industry",  
*Journal of Travel Research*, Vol.13 (2). pp.24-27.  
 Hawaii Tourism Authority (HTA) (2012) *2011  
 Annual Visitor Research Report*, HTA.  
 Takaki, Ronald (1983) *PauHana: Plantation life  
 and labor in Hawaii, 1835-1920*, University of  
 Hawaii Press.  
 Trask, H.K. (1999) *From a Native Daughter:  
 Colonialism and Sovereignty in Hawaii*,  
 University of Hawai'i Press.

## 本稿でみてきた、日本人から見たハワイの印象、都市および観光地としての変化

時 代	日本人がみた印象	都市および観光地としての変化
ハワイ王国	元年者 (1868)	南国 (「熱国」)、親切な人々、生活しやすい、よい所 (「よろしき城下」)
	第一回官約移民 (1885)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・温暖な気候</li> <li>・土地の人々は温和で親切。外国人にも慣れている</li> <li>・土地の人=ハワイ先住民</li> <li>・外国人 (白人含む) の存在が目立つ (国際化進む)</li> <li>・現地語 (ハワイ語) の他、英語も併用 (日本語だけでも差支えない)</li> </ul>
ハ ワ イ 共 和 国	『日本ト布哇』 (1894)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「楽園」イメージ排除</li> <li>・「土地の人=『土人』」として、野蛮、残虐、政治的能力がない等、見下す</li> </ul>
米国併合	『新布哇』 (1900)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「太平洋の楽園」はあくまでもイメージ → 憧れと現実</li> <li>・英語が公用語となり、日本人にも英語学習を推奨</li> </ul>
	『米国布哇渡航問答』 (1902)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「楽園」イメージ排除 (現実的な記述のみ)</li> </ul>
	『最新正確』 (1904)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「布哇の栄枯盛衰は一に本邦移民の掌中に存する」(ハワイにとって在留邦人、日本との関わりが重要)</li> <li>・西洋的な文化・社会を礼賛</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハワイ島の観光地整備</li> <li>・著名な近代建築・公園 (観るべきもの) と、宿泊施設 (利用するもの) とが混在</li> <li>・「土人」の伝統文化の観光化</li> <li>・日本人経営の宿が多いが、白人宅にホームステイを推奨</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・モアナ・ホテル開業 (1901)</li> <li>・日本人経営の宿に宿泊推奨</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハワイ宣伝委員会設置 (1903)</li> <li>・遊覧施設整備。</li> <li>・裕福な日本人向けの高級宿登場。</li> <li>・「人間の博覧会」(都市のテーマパーク化)</li> <li>・近代的な国際都市</li> </ul>

